



Data

監督・脚本：張艾嘉（シルヴィア・チャン）
 脚本：蔭山征彦
 出演：梁洛施（イザベラ・リヨン）
 ／張孝全（チャン・シャオチユアン）／柯宇綸（クー・ユールン）／李心潔（リー・シンジエ）

👁️👁️ みどころ

張艾嘉（シルヴィア・チャン）監督の『妻の愛、娘の時（相愛相親）』は、誰が本妻？ひょっとして重婚罪？という、現代中国の社会問題を含めた面白かつ温かい映画だった。そんな同監督が、本作で商業主義から作家主義に大転換！？

台東沖にある緑島とは？そこで、子供たちに人魚の物語を聞かせていた美しい母親は、なぜ兄妹を引き裂いたの？旅行ガイドの兄は今どこで何を？画家の卵の妹は今どこで何を？そんなテーマが『あなたを、想う。』という邦題の通り、次々と・・・。

正直、緑島も台湾もよく知らない日本人には、本作の理解は難しい。しかし、監督インタビューを読み込むことで、「台北と、台東。美しい光の映像美に、魅了される。あまりにも切ない、母と子、兄と妹、男と女、その物語。」をしっかり味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□張艾嘉監督が商業主義から作家主義に大転換！？■□

張艾嘉（シルヴィア・チャン）監督の最新作は、『妻の愛、娘の時（相愛相親）』（17年『シネマ 42』178頁、『シネマ 44』52頁）だった。そのメインは“お墓は誰のものか？”を巡る闘争（？）で、そこでは、誰が本妻？ひょっとして重婚罪？という、現代中国の「都市」v s 「農村」を巡る社会問題が噴出していた。その邦題はいかにもわかりにくいのが、原題の『相愛相親』の意味は何となくわかる感じ。そんな同作は定年間の夫婦と歌手を目指す若者とその恋人という、第2、第3のテーマを含めて、面白かつ温かい名作で、

私は星5つをつけて高く評価した。

本作はそれに続く同監督作品だが、パンフレットにある監督インタビューで彼女は、「緑島は台湾の東、とても近いところにありますが、ある意味近くて遠いところなのです。」「ずっとこだわっていて忘れられないことへの想いを込めました。」の見出しでわかるように、前作やそれまでの商業主義の映画から作家主義の映画に転換したことを明確に語っている。また、本作のパンフレットの「Introduction」も「Story」も極めて短い。前者では「台北と、台東。美しい光の映像美に、魅了される。あまりにも切ない、母と子、兄と妹、男と女、その物語。」の見出しが、後者には「わたしにとどけ・・・、あなたのこころ。それぞれの想いが生む、忘れぬラストシーンへ。」の見出しがあり、それぞれかなり抽象的だ。

また、本作のパンフレットには、「Introduction」と「Story」の短さに比して、暉峻創三氏の「香港&台湾ニューウェイブと共に生きた女優、シルヴィア・チャン。その監督として、新たなる波を起こす、先鋭的な傑作の誕生。」と見出しをつけた2頁にわたる「Review」や、4頁にわたるシルヴィア・チャン監督インタビュー、さらに2頁にわたる脚本の蔭山征彦のインタビュー、が掲載されている。これらの文章はいずれも難解だからしっかり読み込まなければならないが、わかりやすいのは、暉峻創三氏の次の文章だ。すなわち、

ただ、産業として台湾以上に商業化されていた香港映画界に半分足場を置いていたせいだろうか、あるいは台湾ニューウェイブが芸術性に重きを置くばかりに観客離れを起こしていった姿を目の当たりにしてきたせいだろうか、彼女の監督作は総じて、商業映画として一般観客に分かりやすく語っていくことを重視した作風で知られてきた。そんななか、監督としての定評を完全に確立した彼女が、ついに芸術性、先鋭性の方向に大きく舵を切ったのが、この度日本公開される「あなたを、想う。」だ。

これをヒントに、シルヴィア・チャン監督のインタビュー等をしっかり読み込み、本作に見るシルヴィア・チャン監督の商業主義から作家主義への転換ぶりをしっかり確認したい。

■□冒頭はボクシングのシーンから。この男は誰？■□

本作の舞台は台東の沖にある美しい島・緑島。そして、主人公はその緑島で生まれた兄ユーナン（柯宇綸（クー・ユールン））と妹ユーメイ（梁洛施（イザベラ・リヨン））で、スクリーン上にはこの幼い子供たちに毎日のように人魚の物語を話して聞かせる母親（李心潔（リー・シンジエ））の優しい姿が登場する。1月30日に観たアフガンのカプールの舞台にしたアニメ『ブレッドウィナー』（17年）では、11歳の少女が幼い弟にタリバンの悪行を想定しながら村人を苦しめる象の王の物語を話して聞かせていた。しかし、これらの物語は両者とも当然語り手が勝手に想像したもので、現実に即したものではない。しかし、それを聞かされた幼子はもちろん、場合のよるとそれを語っている本人もその物語

の世界が現実の世界のように思えてしまうから面白い（ご用心？）。

本作はそんな映画であるにもかかわらず、本作冒頭にはなぜかボクシングのシーンが登場し、ヨンシャン（張孝全（チャン・シャオチュアン））が練習に励む姿が映し出される。彼は今は画家（の卵）に成長したユーメイの恋人だが、どうやら、網膜剥離に悩まされているらしい。しかし、彼にとってボクシングは亡き父と自分をつなぐ唯一のものだったため、彼はそれをコーチに隠し、なんとか試合に出ようとしていたが、網膜剥離がバレたらそれは到底ムリ！さあ、そんなヨンシャンの今後の奮闘とユーメイとの恋の行方は？

■□■緑島 vs 奄美大島、張艾嘉 vs 河瀬直美■□■

『2つ目の窓』（14年）は、自分のルーツが奄美大島にあることを知った河瀬直美監督が、奄美に伝わる「ユタ神様」伝説を軸とし、16歳の若い男女の性の芽生えに焦点を当てながら独自の死生観を展開した映画だった（『シネマ33』76頁）。同作は、河瀬監督が撮影監督として起用した山崎裕のカメラがとらえる美しい奄美大島の海と自然の風景が特徴で、制服のまま海中に潜る杏子の姿や、素っ裸の杏子と界人が2人仲良く海中を遊泳する美しいシーンが印象的だった。それに対して、本作では緑島の海の中を潜るのは人間ではなく、人魚らしい。私は奄美大島にも台湾の緑島にも行ったことはないが、スクリーン上で観るその海と自然の美しさは見事なものだ。

他方、河瀬監督の『2つ目の窓』は前述のとおり、16歳の若い男女の性の芽生えに焦点を当てながら独自の死生観を展開した映画だったが、シルヴィア・チャン監督の本作は、一方で現在のユーメイとヨンシャンの恋模様をメインストーリーとして見せながら、随所随所に緑島での過去の物語を錯綜させながら、母と娘、兄と妹等の家族の絆を描くものだ。このように、両者のストーリー構成は全く異質だが、作家主義を目指した映画という意味では両者に共通点が！

■□■妹ユーメイの今は？絵のテーマは？恋模様の展開は？■□■

本作でユーメイを演じる梁洛施（イザベラ・リオン）は一見、中国の徐静蕾（シュー・ジンレイ）や日本の中山美穂に似た（？）知的美女で、本作は6年ぶりの映画出演になるそうだが、さすがシルヴィア・チャン監督が本作に抜擢しただけあって、魅力的だが難解なユーメイのキャラを見事に演じている。子供のころ緑島の中であんなに兄妹に優しくした母親は、その後、兄と夫を島に残し、幼いユーメイだけを連れて台北に行き、まもなく他界してしまっらしい。それがどんな事情によるのかは、近時の何でも説明調の邦画と違い、本作では全く語られていないが、否応なくそんな境遇におかれたユーメイが母親を恨んだのは当然。私の家族を引き裂いたのはあの母親だ。そんな思いの中、ユーメイは今はどこで何をしているのかもわからない兄への想いも募っていたが・・・。

近時は『ゴッホ～最期の手紙～』（17年）（『シネマ41』未掲載）等、画家ゴッホを描い

た映画が多い。『世界で一番ゴッホを描いた男』（16年）という興味深い中国映画もあった（『シネマ 42』136頁、『シネマ 44』313頁）。「ひまわり」をはじめとするゴッホの絵が好きかどうかは人によって分かれるが、本作で画家（の卵）に成長したユーメイがアトリエで描いている絵は、その力強さや絵の具の重ね具合は一見ゴッホ風？それも人によって違うだろうが、少なくともユーメイが描こうとしている絵のテーマが、故郷・緑島の海の風景であることは間違いない。その絵の中に母への恨みを込めれば陰鬱な印象の海になるだろうし、ボクサーの彼との恋模様が順調に進めば明るい印象になるはずだ。前述したヨンシャンとユーメイとの恋人ぶりは一見順調そうだが、ヨンシャンの網膜剥離だけでなく、今ユーメイは妊娠していることに気づいたから、彼女の人生の選択も難しくなっていく。すると、ユーメイが生涯のテーマとして描いている緑島の海の風景は？その明暗と陰陽は？

■□■兄ユーンの今は？「バー藤」の居心地は？■□■

2018年の日本は台風7号の影響による7月豪雨や9月3日～5日の台風21号等によって連続的に大変な被害に見舞われたが、台湾は日本以上に頻繁に台風被害に襲われる国。ユーメイが画家（の卵）なら、ユーンは今、台東で旅行ガイドとして働いていたが、ある日台風に遭遇したから大変だ。台東は私も旅行したことがあるが、東に太平洋の大海原が広がるこの一帯は明るく燦々と照りつける太陽がまぶしく美しい。そしてその砂浜はあくまで白く美しい。しかし、そんな美しい海沿いの台東のまちも、台風に襲われると・・・。

篠原哲雄監督の『地下鉄（メトロ）に乗って』（06年）（『シネマ 12』45頁）はタイムスリップものだったが、同作のハイライトは、東京の「バー・アムール」における「4者会談」のシーンだった。近時の日本では1960年代に流行った「スナック」が復活しているそうだが、バーとスナックの区別、線引きは難しい。しかし映画ではしばしばバーやスナックは酒を飲むための場所だけではなく、登場人物たちが語り合う舞台として重要な役割を果たすことが多い。しかし、本作では台北の繁華街にある「バー藤」がその役割を。台風の日ユーンが雨宿りを兼ねて飛び込んだ小さなバー藤は狭いけれど清潔。そして、頑固親父が作るこだわりのカクテルは絶品。相場はそう決まっている。ところが、はじめて飛び込みで入ってきた客のユーンが「ビール！」と注文したのに、「うちはビールは置いていない」とは、いかにも台湾流！？ユーンにとってそんな「バー藤」の居心地は如何？

それはともかく、シルヴィア・チャン監督が描く「バー藤」での、夢のような現実のような若いユーンと頑固親父のマスターとのやりとりをしっかりと楽しみたい。

■□■緑島でのダイビングは？監督インタビューは必読！■□■

母親が幼いユーンとユーメイに語り掛ける本作の物語の中では、緑島の美しい海の中

を泳ぐのは人魚。しかし、スクリーン上では、その人魚が人になり、また人が人魚になる美しい映像が登場してくる。そこで、シルヴィア・チャン監督はユーメイを演じるイザベラ・リオンにはフリーダイビングを命じた(?)わけだが、さあ、本作に見るその幻想的で美しいシークエンスは如何に? 『2つ目の窓』では、16歳の若い男女が奄美大島の海に潜る美しいシークエンスが印象的だったことは前述したが、西谷弘監督の『真夏の方程式』(13年)では、現在東出昌大との離婚問題で悩んでいる渡辺謙の娘、杏が日本人離れた肢体で波瑠ヶ浦の美しい海の中を潜るシーンが印象的だった(『シネマ31』228頁)。

本作では、そんな美しい海中でのフリーダイビングを見ながら美女比較をするのも一興だが、シルヴィア・チャン監督が語る緑島の成り立ちや、母親がなぜ兄からも妹からも恨まれるような行動をとったのかについては、パンフレットにあるシルヴィア・チャン監督のインタビューをしっかりと読み込む必要がある。もともと、それは3頁に渡る長文であるうえ、活字の色の関係で非常に読みにくい。しかし、見出しに書かれている「緑島は台湾の東、とても近いところにありますが、ある意味近くて遠いところなのです。」の意味を理解するためにも、また、「ずっとこだわっていて忘れられないことへの想いを込めました。」の思いを理解するためにも、これは必読だ。なぜなら、作家主義を貫いた本作では、緑島の歴史や背景について何も知らない私たち日本人は、ノホホンとスクリーンを見ているだけではそれらの意味を理解するのが難しいからだ。

そこで、そのポイントだけを指摘しておく、次の諸点だ。

- ①母親は(台湾の離島)小琉球の漁民の出身で、緑島の夫のもとに嫁いできたこと。
- ②緑島はかつて政治犯が送られた土地で、島全体が刑務所だったため、1度送り込まれたら逃げ出すことができなかったこと。
- ③夫婦で食堂をやっていた母親は、知識の豊富な政治犯から影響を受けたこと。
- ④妹のユーメイは母親と似て空想が大好きだったから、母親が話したおとぎ話を全部信じたこと。
- ⑤現実的な兄のユーナンは妹と正反対で、「そんなことあるわけない」と信じなかったこと。
- ⑥しかし、妹は本当のことだと言うため、兄の心には「お母さんはいつも妹ばかりを愛している」というわだかまりが消えなかったこと。

韓国のポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)と同じように、本作のような作家性の強い映画では、「ネタバレ厳禁」が当然だからこれ以上は書かないが、とにかく本作では、シルヴィア・チャン監督のインタビューは必読! 観客1人1人が想像力をたくましくしながら、美しい緑島出身の兄と妹の物語をしっかりと味わいたい。

2020(令和2)年2月10日記